

気象・こたつ・火事

蔵重一彦*

戦前の東京の家庭暖房は火鉢が多かったようである。このため家庭暖房の完備した北海道辺の人が冬、上京してきてかぜを引いて帰ったと言う話をよく聞いた。その東京へ近年はりこたつと称する腰掛け式のこたつが流行してきた。この現象は終戦後の事らしい。古い畳屋に聞いた所によると埼玉県あたりから流行してきたものと言う。筆者の約10年にわたる東北、北陸の生活経験ではこれ等の雪国ではほりこたつを殆んど使っていない。坐って暖を採る、いわゆる切りこたつを用いている。

切りこたつは雪国の生活の中心と云える。半年も雪の中で生活する人々の中には、こたつに当たりながらくみかわすこたつ酒をこの世の無上のダイゴ味と唱える人もある。気温が零下数度位まではこたつで暖が採れるが、零下10数度となるとこたつでは無理なようである。この程度の気温になると、こたつに当たっている腹の方は暖いが背中の方はぞくぞく冷えて来る。この辺からはどうしてもストーブのお世話にならないと仕方が無い。地理的に言うと、仙台あたりがこたつとストーブの限界で、それから北はストーブと言う事になりそうである。岩手県あたりでは近年、都市では薪ストーブの使用が増しているが、農村は矢張り昔通りのこたつが多い。

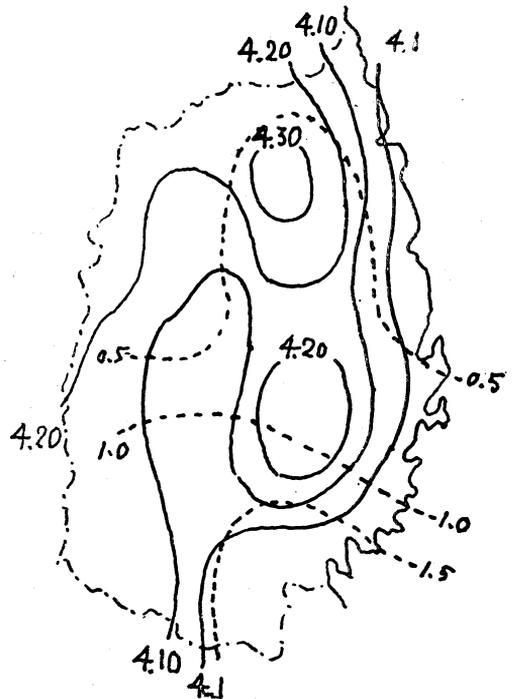
岩手県下で42カ所の農業改良普及員、並びに52カ所の小、中学校にお願いして、こたつを使い始めた日と外した日とを調べた事がある。それによると、こたつの始日は県の北部の10月20日から県南及び海岸に向かって次第に遅れ、最も遅い地方は県南東部で12月1日と言う事になっている。またこたつの終日は県の南東部及び海岸地方の4月1日が最も早く、県北に向かって遅れ、最も遅い地方は4月20日である。等日線を引いて見ると、等温線の走り方とよく似ているのが分った。そして各地のこたつの始日と終日の平均気温を調べ、その回数を調べたところ、下表のようになった。

回数	気温												計	平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
始日	0	1	1	1	5	17	7	3	2	0	0	1	38	6.3
終日	0	2	0	5	7	9	8	5	4	4	1	0	38	7.8

表で分るように始日も終日も6°Cを山とする分布をしている。また始日の方は6°C近くにまとまっているが、終日の方はその上下の分散が大きい。標準偏差をとって見ると、始日の方は1.8°C、終日の方は2.2°Cである。これをみると寒さに対する体の慣れと言うような事が影響しているのかも知れない。つまり始日には敏感に反応するが終日の方は鈍感になって、暖くなってもずるずるとこたつを使っていると言うような事が、上記の分布に現われているのであろう。いずれにしても6°Cと言う気温は非常に顕著である。桜の開花日は10°Cの等温線を追

って進むと言われるが、同じ言い方をするとこたつの始終日は6°Cの等温線を追ってと言えるだろう。人間の寒さに対する反応が案外敏感なのに驚く。

岩手県のこたつの終日が北と海拔の高い地方に向って遅れて行くと言う事と岩手県の乾燥期は東京あたりより約一カ月遅れて4月中下旬であり、この季節に火事の件数が年間で最大になると言う事実とが重なって、岩手県の火事の原因の地理的分布が見られる事になる。岩手県では火事の原因はこたつと炊事の不始末とが一番大きな比率を占めているが、県の北部では、こたつ火災が炊事火災より多く、南部では反対に炊事火災がこたつ火災より多くなる。県消防課の出火原因調査からこたつ火災の件数で炊事火災件数を割った数字を地図に記入して等値線を描くと附図の点線の様になり、県の南部では数字は1以上(炊事火災が多い)県の北部に行く程1以下の数字になる。図にはこたつの終日を示す等日線を実線で記入したが、両者は大体対応している事が分るであろう。私はここに、気温・こたつ・火事と言う三つの現象を三題話のように連ねている目に見えない糸が見えるような気がするのである。



岩手県下のこたつの終日の分布(実線)と火災原因(点線)の分布、実線附記の数字、例えば4.10は4月10日の意味、点線附記の数字はこたつ火災件数で炊事火災件数を割った数字。1より大きい地区は炊事火災の方が多しことを示す。

* 気象研修所